



みなみの風

坂下南小学校
学校だより
NO. 90
R7. 2. 6
(文責:校長 菅家 篤)

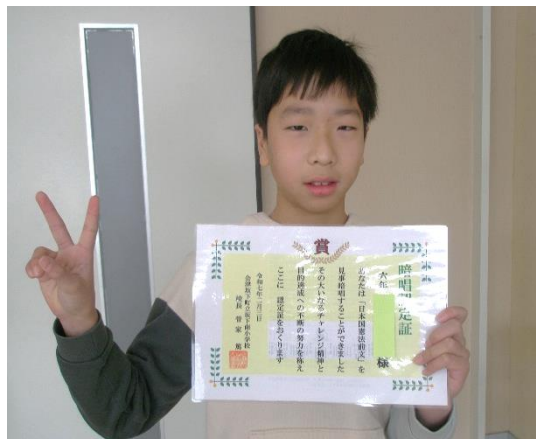
ドリーム & チャレンジ！ ～あいさつ・はっぴょう・なかまとじぶん～

日本国憲法前文暗唱



3人目の合格！

2月3日、6年生3人目の合格者が誕生しました。(写真)
暗唱合格までの道のりには、家族の協力があったとの話を聞き、大変嬉しく思いました。卒業式まで学校生活があと28日となりました。一人でも多くの6年生が、チャレンジしてくれることを期待しています。



一カ所を掘り続ける

～暗唱やなわとびにチャレンジする一途な子ども達～



これまでに3名の6年生が、暗唱チャレンジの卒業課題「日本国憲法前文」にチャレンジし、見事合格しました。また、県教委主催の「なわとびコンテスト」(短なわとび部門)に2名の子ども達がチャレンジしました。

一途というのは、美しいことです。

「こんなに地味なことを、コツコツやっていてなんになるのだろう？」

たとえそんな疑念がよぎっても、一途さを手放してはいけません。掘って、掘って、掘り続ける。何も出なくても掘り続けます。

「ああ疲れた、こんなところ掘っても無駄だ、もう無理だ」と思った瞬間、ぽろりと宝物が出てきます。誰かがその一途さをちゃんと見ていてくれています。せっかく掘り始めたのですから、たとえ小さな穴でも途中であきらめてはつまらないことになります。

「好奇心」は大切ですが、一つの穴を掘り始めてすぐ結果が出ないからといって、「あっちを掘った方が良いものがあるかもしれない」と思ってしまうと、あげくの果て、あちこちに中途半端な小さな穴があいているだけで、宝の鉱脈にたどり着けないことになります。

「掘る」行為は、「好奇心」とはまた別のものです。穴を掘るというスタートラインでは、才能は関係ありません。掘り続けていくプロセスには特別な「技術」もありません。肝心なのは、ただひたすら同じ場所を掘り続けること。一途に継続し、そこに自分なりの喜びを見出すこと。ただ、それだけです。暗唱やなわとびに一途に取り組んだ子ども達は、自分だけの宝物を見つけたに違いありません。

年賀状を整理していたこと・・・

世の中の多くのものがデジタル化している今日ですが、歳の暮れになると、日本国民の多くが、一斉に「年賀状」という“アナログ”発信を行います。先日、届いた年賀状を整理しながら思いました。

年賀状がなくても、お正月は迎えられます。

教室に花が飾ってなくても、授業はできます。

「おはよう」と言わなくても、一日は始まります。



でも、これらがなくなった生活を考えると、ちょっと淋しいですし、味気ない気持ちになりませんか？人間生活にはムダに思えるようなものや面倒そうなものがかかりありますが、そんなものがあるために、情緒が生まれ、潤いができ、人の心が和むような気がします。年賀状を送っていただいた方々に感謝しながら、忙しい生活の中で、心が穏やかになれました。